医学科という一つ屋根の下で

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9485

医学科という一つ屋根の下で

Under a roof of medical school

金沢大学医学部歯科口腔外科学講座教授
山　本　悦　秀

本学歯科口腔外科学講座を担当させていただいて12年余，歯学部出身者で構成される当教室の教室員のうち23名の論文がこの十全医学会誌に，その他3名の論文が国際誌に掲載され，計26名が「医学」博士の学位を受領した．ちなみに筆者は東京医科歯科大学大学院歯学研究科を修了したので，本学ではおそらく唯一人の「歯学」博士であろう．筆者が歯学部を卒業後30年半，その内22年半にわたり医学部に奉職していることになるが，これは歯学部出身者の中で口腔外科学を専攻した者のみに許される特権と言えよう．歯学部附属病院には保存科(歯の治療)，補綴科（入れ歯等），口腔外科の主要3科に加え矯正科（歯並びの治療）および小児歯科等が常設されている現状にあるが，この中で守備範囲の広さでは口腔外科が際だって突出していたことが筆者にとっての専攻の大きな理由であった．この口腔外科を大学病院で専攻するには歯学部と医学部のいずれも可能で，その名称は前者では単に「口腔外科」，後者では一般に「歯科口腔外科」と称している．診療内容は殆ど同じようであるが，周囲の環境は大いに異なっているので，この点について触れてみたい．

そもそも我国の医学部に歯科が初めて創設されたのは東京大学で，ちょうど百年前の明治33(1900)年5月，東大出身の医師であった石原久先生が助教授として主任に就任，さらに大正4(1915)年1月に歯科学講座教授に昇任した時代に遡る．その後，阪大や九大等の旧帝大にも設置されたがいずれも医師が教授職に就いている．そして歯学部出身者が医学部歯科口腔外科教授として講座を担当するのが一般的になったのは医学部が急増した昭和40年代以降である．現在，我国において歯学部を併設しない医学部64校中に歯科口腔外科の教授は55名おり，そのうち医師免許を持つ教授は5名のみという時代になった．

ここでは「歯学部出身の筆者にとって」と一人称に限定して，医学部における歯科口腔外科の長所・利点を歯学部口腔外科との比較から述べてみたい．まず臨床面では，1）歯牙齲蝕症（虫歯）から口腔癌まで口腔領域疾患をトータルに治療できること，2）臨床各科との緊密な連携のもと，特に全身疾患を有する患者さんにも，より高度で合理的な医療が提供できることが挙げられる．また教育面では，3）学生教育の占める時間的・精神的ウエートはかなり少ないこと，これに比して私立歯大では国試合格率に大学の命運がかかっているため，学生教育に相当のエネルギーを要する．4）歯科医師の卒後研修では，当講座に全国の歯学部を卒業した北陸出身者が戻り，少数の出身大学に偏することなく多彩なことである．さらに研究面では，5）大学院研究科委員会等を通し，居ながらにして広い医学研究の最先端情報が吸収できること，特に筆者の専門とする口腔癌研究では各科領域の癌研究に示唆的で有益な発表が多く，これらの点はいずれも歯学部口腔外科では望めないことである．そして最後に，6）歯学部出身者がただ一人，医学科教授会あるいは診療科長会に参加する時の緊張感はハードではあるが，それは一方で大きなやり甲斐でもある．

もっとも，この「大きなやり甲斐」と言える心境に至るまでは，やはり相応の年月を要したように思われる．特に，前任で初代教授の玉井健三先生（昭和52年1月からの診療科教授を経て，57年4月より講座教授）が昭和62(1987)年10月に特急列車内で52才の若さで急逝されたことは筆者の心に重くのしかかっていた．先生の日頃の猛烈な仕事ぶりを読んだり聞いたりするたびに，歴史と伝統を誇る本学医学部における初代の歯科口腔外科教授として相当なストレスがあったのではと推察されたからである．しかし現在，筆者は玉井先生の年齢を3歳上回り，心の重石が一つ取れたように実感している．研究領域も当時の歯性感染症単独から，口腔癌，顎変形症および顎関節症を加えた4本柱とし，既にそれぞれの領域で学位を受領している．医学部歯科口腔外科は医科と歯科の接点にあることは確かで，今後とも両科の架け橋としての役割を果たしつつ，医学科という一つ屋根の下の一講座として，診療・教育・研究を通し微力ながら本学の発展のために全力を尽くしていきたいと念じている．